

三 素顔の代議士

世間では、特に日本では、代議士といえなにかしら特殊の体臭をもつた人種のように見られるのが常である。自分自身、代議士をしていて何という特別の感慨も湧かない凡骨の人間の一人と心得ているのに、何故世間ではわれわれを特別な人聞のように取扱うのか不思議に思えてならない。

そこでここでいう特殊な体臭とは何かということを考えてみるのであるが、第一に代議士という職業は、これによつて収入を得て自分の暮し向を立てるといふ意味における普通の職業では少くともない。毎月いただく歳費七万八千円、通信費一万円計八万八千円（税引手取五万九千円）という金額は決して少ないものではない。しかし正直にいつて、これだけでは自分のうちの家計だけを満すこともできない。

金のことをいえば、これほど金のかかる商売はない。何か吉凶禍福があり、それが自分と何らかのかかわりがあるとなると花輪の一つも用意しなければならぬ。何か人の集る行事があるのを聞き込めば、祝電を出したり場合によつては優勝旗やカップを寄贈したり、祝酒の二、三本を

贈らねばならない場合がある。神社や仏閣に工事でもあれば、応分の寄付が要る時もある。新聞や雑誌に対しては少くとも年賀と暑中見舞の広告代位ははずまなければならぬ。郷里に帰れば事務所の家賃、電話代、自動車賃をはじめ宣伝費、会場費などが待っている。暑中見舞や年賀の挨拶などは近頃虚礼廃止の意味でやめることになっているが、止めると苦情が多いので全廃はできない。

東京においては、毎日平均して十数人の来客がある。その多くは何かの要務をもって地元から出てこられた人々である。食事時になれば、たとえ粗末な食事でも差上げるのが礼儀である。あの人にはお茶、この人には食事というわけには行かない。山ほど積まれた仕事を一つ一つ片付けていくには電話ばかりでは足りないので、自ら出かけなければならぬ。市電の吊革にぶらさがっていては仕事にならないので、自然自動車を使うようになる。ガソリン代から修繕代それに運転手の給料を加えると、どうしても六、七万円はふつとぶ。秘書一人では到底仕事がさばけないので、東京現地を通して二、三人の人に手伝ってもらわなければやって行けない。

国会周辺には数十の雑誌と新聞がある。数多くの浪人が生活している。それらに対するエチケツトも多少は心得ていないとおつき合いにはならない。代議士仲間の会合にも仲間外れにならないように心掛けて顔を出す。県人会や同窓会というような行事に欠席することは禁物だ。こうし

たことも皆選挙を考えてのこと評判を気にしてのことといえ、それまでであるが、選挙の回を重ねいよいよ地盤なるものが稍々かたまってくれば、やめてしまうことができるかというところが行かない。地盤が拡充されると知人が多くなり、恩誼が重なってくるので、尚更余計に出費がかさむというのが一般である。

代議士ほど神経を使う仕事は少い。しゃべりすぎると、彼は浅薄だとか宣伝屋だとけなされ、黙っていると無能でつまらないと非難されかねない。凡ての時間を政治に打込んでいると、他に能がないからといわれ、他の職業をもっていると政治道楽だと陰口されるのがおちだ。議会の仕事に懸命になれば選挙区をないがしろにすると叱られ、選挙区にばかりいると中央では重視されないからだと噂される。だから異常に神経を働かせて、ほどよい中庸の道を歩むように心懸けねばならない。そして万人の恋人たらんと希い願うのであるが、結果は一人の恋人を得ることもできなくなるかもしれない。

子供が東京に行くので、入学の世話はできないか。幸に入学できたが下宿はないか。卒業期が迫ってきたが手頃の就職口の斡旋をしてもらいたい。事実私のところにも毎年百六、七十通の履歴書が送られてくる。去年はあれこれと走り廻ってやっと二十七人のお世話ができたが、大半の人にはその希望を叶えてあげることができなかった。酒屋、麹製造、タバコ屋の免許を心配しる

という。これにも尽せるだけの手を尽さねばならないが、一つの成功はそれに数倍する敵を作ることになりかねない。河川、道路、街路、港灣、漁港、溜池、用水等の改良や改修、学校の新築改築、水道工事、保育所の設置、タバコ収納所の買収や新築、植林、国立公園の認定、電気事業、その他に伴う補助金や起債の獲得という公共の仕事には、はじめて代議士としての誇りと責任を純粹に感ずるが、この仕事とて予算の制約の下、決して楽ではない。

税金が高すぎる。代理販売権をとれ、金融の斡旋をしる等はよいとしても、この品物の売込みに協力せよ、この争いを調停しる等の注文には、いささか閉口する場合もある。朝は七時頃から電話が次々とかかる。夜は十二時過まで呼び出される。ともかくも一人の能力に数倍するサービスが代議士には待っている。イギリスのスネル卿は下院議員としての経験を次のように語っている。「七年間の経験によれば、議員は選挙民の誰よりも長く緊張した仕事を負わされる。もし工場で働いている労働者、鉱山の坑夫あるいは技師達が、議員と同じだけの緊張をもって働かされるならば、一ヶ月もたたないうちにその仕事をやめて他のもっと条件のいい仕事をやりたいと申し出るにちがいない」と。

それに代議士ほど弱い人種はいない。四六時中、言動に気をつけ身なりや演出に苦勞するようになる。喜怒哀楽を素直に露出し発散することも、時と場合によっては抑制しなければならない。

この人は嫌だと思つても、それを露骨に現わしてはいけぬ。この人は特に好きだと思つても、その人だけに特に親しくすることもできない。旧い恩師、昔からの友のところでも半日でも寝ころんでゆつくり話し合いたいと思つても、周囲の人に気兼ねしなければならぬ。この村にはいれば誰を先ず訪ねるかが代議士にとっては重大な決心事になつてくる。かくて終始、人間性を抑制せざるを得ない。しかも人間性を抑制しつつもなお何のこだわりもないような自然な演出を打出さなければならぬ。

更に代議士ほど評判に敏感な人種もない。従つてジャーナリズムには一番弱い人種である。一つのペンの走りようで、活殺自在のまな板にのつてゐる人種である。しかしジャーナリズムの材料に全然ならないことも代議士にとっては禁物であるが、それがマイナスの材料になつては大変だ。「フグは食いたし生命は惜しし」という人間心理が、ジャーナリズムに対する代議士の反応心理なのだ。いち早く重職要位について、支持者に応えようと思つても、政界山脈はけわしく押すな押すなのはげしい競争である。といつて猟官運動などで品位を下げたくない。金もほしいが、金もらしいの類と同視されてはかなわぬ。かくて代議士は日夜、戦戦恐恐として評判を気にしている人種だ。

断 想 会 国

こゝ書いてくると代議士ほどつまらない商売はないようであるが、代議士にはそれ相当の楽し

みや悦びがないでもない。毎年正月には夫婦づれで宮中に招かれる。春には観桜、秋には観菊といつて宮中の客中となれる。国会に入れば代議士でないと一言の発言もできない。赤いじゅ、うた、んの上では代議士ではないと市民権を主張することができない。汽車や電車は優待であり、役所に行けばこわもてである。何れの一つをとってみても有難いことである。

それに今日、代議士には大きい権力が与えられている。そしてこの権力に伴う特権意識がここにいう代議士の体臭の一つになっていることも否めない。しかし代議士と権力については、もつと吟味を要する問題があるわけで、一概に代議士を権力者とみるのは誤っている。なるほど法律案や予算案を通して正当に行使できる権力があるのは当然だが、今日の民主政治の下においては、本来代議士自身には権力はない筈である。権力の淵源は人民にあるのである。最近の重要法案の成立、難航、消滅等の過程をみても、その是非はともかくとしても、それは他ならぬ人民の側における要請や抵抗によるものであって、代議士自身の恣意に由来するものではない。代議士を権力者とみるのは、人民大衆の輿論を代表し、またはこれを利用して国会活動をするその表面相を捉えていうにすぎないのであって、独裁国家の権力者とは似ても似つかぬものである。むしろ代議士の権力は、国会の行政監督権を通して発散される一種のマッカーシズムのような臭いのする権力意識を、世間では権力ととりちがえているにすぎないのではなからうか。仮りに代議

士の言動によって何か重大な結果とか影響が生れてきたとしても、それは分散した輿論の妥協苟合から偶然に生れたものであつて、特定の代議士の権力行使に由来するものではない。

代議士と権力というものがそういう関連をもっているとしても、世間では、何かしらこの代議士を特殊な人間型にはめこんで理解しようとしている。それは今の時代が個人の時代ではなく、人間を類型化した集団の時代であり、その集団の類型意識を具現するチャンピオンが歴史の齒車を押し進めている時代である。そうだとすれば、代議士もまたそういう数多くの人間類型の一つにすぎないのであるといつてよい。しかしその中で代議士というのは特に見栄坊で、弱い、そして浪費型の人間類型の一つであるにすぎないのではなからうか。

それは一見愚劣な職業であり憐れみをさえ催すに足る人間類型であるうが、当の本人はもとよりその主人公である人民自身も十分それを見究めていないように思われる。当の本人は、自らが結局天国へ上るのか地獄に陥るのか一向に見当がつかずに、遮二無二、次の選挙目当てに狂奔している。また主人公たる人民は、競馬の馬券を買った人々のように血眼になつて代議士をめぐる政争というゲームに夢中になつている。そこにあるものは無限に続くゲームの世界であつて、そのゲームに関わる範囲において国家とか民族とかの命運が論議されているといつても大きい失当ではなさそうだ。

カトリックは、二千年に及ぶ古い伝統と統治の経験から、人間は隣人愛と権力崇拜とを教える信仰でもって統治される必要があると主張し実践している。モスコフは社会主義を実現するには革命を組織しなければならぬとし、厳格に人心を統制して共産主義の新道徳を教え、社会改造に必要な犠牲を甘受させようと目論んでいる。そのいづれもが神話による人民統治である。そして、それらが現世の幸福が窮極の救いかそのいづれを約束するにしても、一様に独裁制に転化してしまふ宿命をもっている。

しかるに、われわれの代議政治は、窮極において世界をどのように創造するかについてはなんらの確たる目論見を措定することなく、毎日毎日金と神経と時間の限らない費消のうちにはげしい政争の世界に没頭している。世界の命運は神の手にあるのであつて、われわれは毎日、民主政治のルールを外さないように駆け廻つていけばよいのだ。そうだとすると代議士という人間類型は、せい一杯狂奔を続けている民主政治のかいらいであるといえないこともなさそうである。それは一つの喜劇であるともいえようが、また痛ましい悲劇といえないこともない。

しかし最後にわれわれ代議士も代議士たる前にただの人間である。日常の喧騒の中に静かに自分に還るひと時がある。またわれわれにとって去就と進退を運命的に決断しなければならぬ巖頭に立つ場合もある。そうしたときに、われわれの胸中にほのぼのとよみがえる素心一点は、や

はり自分は平凡なる人間であるという自意識であり、進むべき道は人間の倫理という平凡な道しか残されていないのだという諦念である。代議士もまたあくまでも凡骨の人間　　いかに彼をとり巻く数々の体臭はあるにしても　　にすぎないのだから、代議士に向つて常人よりも特に高い倫理水準を求めることもなく、同時に代議士を目して悪徳の権化のようにみることもなく、ただの平凡なる一個の人間として、あたりまえに取扱つてもらいたいというのが、平凡なる私の平凡なる希願である。民主政治の本体というものは、元来そういう平凡なものであると思つからだ。